北方山草(38): 55-62, March 2021

函館山脊梁部における由来不詳の2種の「在来」キク科植物と「侵略的」外来植物の繁茂

北斗市　長谷　昭

はじめに

函館市を代表する観光地であり山頂からの夜景で有名な函館山は、御殿山(標高334m)を主峰とする13の丘陵の複合体であり、函館市市街地側から見ると牛が伏せているように見えるために臥牛山とも呼ばれている。周囲9km程の狭い陸繋島でありながら600種以上の維管束植物を有し(菅原・小松1959)、固有種はないがその中には道内では稀少な多くの植物を含み、またスミレ類の名所としても知られている(丸藤2008、梅沢・伊藤2003)。そのこともあり、函館山の主要部は、「函館山自然林」として1979年に環境省から特定植物群落に選定されるなど、数々の評価を得ている(函館市2009)。

一方、函館山は、江戸時代からの開拓による人為的攪乱の歴史を持ち、建築資材や燃料等のためにほぼ全山の木が伐採され、18世紀末にははげ山状態であったとされているが、進んで植樹する者がいない中、七重村(今の七飯町)の倉山卯之助によって19世紀初頭にスギが植林されている(函館市史編纂室1980、函館市2009)。しかし、植林地以外のはげ山状態は明治期にも続いており、明治時代初期及び中期に撮影された函館山の写真にもその状態が写っている(函館市中央図書館デジタル資料館「写真」、URL: http://archives.c.fun.ac.jp/fronts/index/photos; 2020年11月27日確認)。

自然林に近い状態に回復したのは、1898年から約4年間を費やして函館山に建設された函館要塞によるものである。1899年に制定された要塞地帯法により、第二次世界大戦終戦後の1946年の解放まで、函館山への一般人の立ち入りがほぼ半世紀にわたり禁止され、そのことが自然植生の回復をもたらし、函館市都市公園条例(1958年3月制定)による保護によりさらに促進されたと言えよう(函館市2009)。

しかしその一方では、戦後復興と高度経済成長の波にのり、1952年には観光登山道路が完成し、御殿山への展望台、ロープウェイ、テレビ電波塔などの設置、他のピークでの通信施設等の建設、千畳敷でのスキー場開設など、大型工事が函館山の山頂や脊梁部で続き、それを支える工事用車両の通行のための道路も整備された(函館市2009)。現在も、当時建設された施設の老朽化による撤去や新設・改築の工事が断続的に行われており、施設の維持管理や工事のための車両が往来している。

このような歴史的に繰り返された保護と開発という相反する行為が、函館山の植生に大きな影響を与えており、特に、開発の圧力が強い脊梁部に顕著にその影響を認めることができる。

本稿では、在来植物の宝庫でありながら、同時に外来植物の「展示場」ともなっている函館山の脊梁部を縦断する道路沿いに繁茂する、由来不詳のキク科の「在来種」キクタニギク(アワコガネギク)及びイワヨモギと、その近辺に生育する「侵略的」外来植